

# 一〇〇年ぶりの暑い夏が到来 屋内外で熱気・熱波に万全対策を

空条 円  
Madoka Kujo

一〇〇年ぶりの夏季五輪が行われるフランス・パリでは、各競技のトップアスリートらによる熱戦が繰り広げられる。七月二十六日の開会式の場所はパリ中心部を流れるセーヌ川。コロナ禍で多くの会場が無観客となった前回の東京大会とは一変し、世界中の人たちが通常開催によるスポーツの祭典を心待ちにしているだろう。

同国内での聖火リレーは南部マールセイユからスタートした。モンサンミシエルやベルサイユ宮殿など名所を巡りながら国の歴史や観光資源を世界にアピール。海外のフランス領も聖火のルートに入れ、サー

フィン会場となる南太平洋ポリネシアのタヒチ、カリブ海にあるグアドループ、マルティニクも巡り、国の大きさや一体感を示す狙いのようだ。

レガシー（遺産）の継承も注目される。一九二四年のパリ大会でのメイン会場はパリ市郊外のクロンプにあるイブ・ドゥ・マノワール競技場。二度目の五輪では、当時と同じ色合いに戻す改修作業が行われ、ホッケー会場として活用。競技場の柱や屋根は建設時のままだという。

フランスの「国立競技場」としての役目は、一九七二年にパリ市内に完成したバルク・デ・フランス競技

場に引き継がれた。サッカーの強豪

パリ・サンジェルマンの本拠地としても知られる。現在は一九九八年のサッカーワールドカップのメイン会場として、パリ郊外のサンドニに建設されたフランス競技場が同国スポーツ界での象徴的な競技場となる。今夏の五輪では一〇〇年にわたって同国を代表する競技場としての役目を果たしてきた、三つの競技場がそろって使用される。

パリ大会を一層盛り上げるために若者の関心を引き付けようと、国際オリンピック委員会（IOC）が注力しているのがアーバンスポーツだ。五輪改革の新指針「アジェンダ

2020+5」の一環で、東京大会

から実施競技となったスケートボード、自転車BMXフリースタイル・パーク、スポーツクライミングに加え、ブレイキン（ブレイクダンス）が新競技として行われる。

本戦だけでなく、予選の段階から工夫を凝らす。アーバンスポーツの複数競技の予選シリーズを一つの会場で実施。初の試みのコンセプトは「フェスティバル」。屋外での場内実況や音楽が流れる会場には、野外フェスの雰囲気漂う。異なる競技の魅力を楽しめるほか、垣根を越えた選手間の交流などの相乗効果も期待される。新たな五輪の伝統競技

として歩み始めたアーバンスポーツの今後が注目される。

## 気温上昇で五輪に悪影響も

大いに盛り上がる競技会場は選手や観客もヒートアップし、熱気にあふれる。気候変動による気温上昇も踏まえ、これまでの夏季五輪以上に暑さ対策が重要となろう。近年、フランスの夏は毎年のように熱波が到来し、パリでは二〇二〇年八月初旬に一週間ほど四〇度近い日が続いた。

日本と違ってフランスでは室内にエアコンが設置されていない建物が多いそう。構造的に熱がこもりやすい競技施設については、競技時間の変更などの可能性もある。街中には水飲み場を増やし、冷却ミストや日陰エリアを設置するなど、暑さによる選手や観客らの健康被害の防止に努めている。

地元のパリジャンやパリジェンヌの暑さ対策は、避暑地へのバカンスのようだ。五月頃に欧州視察でパリを訪れた企業関係者の話によると、

現地では近年の猛暑続きでバカンス需要が高まっているという。特に今夏は世界各国から人の波が押し寄せ、熱気が更に高まる街に居残るよりは、例年以上に郊外での長期休暇を楽しもうと考える人たちは少なくないだろう。

パリ市民の五輪への関心度は別として、経済界の期待は大きい。パリ五輪・パラリンピック組織委員会が五月に発表した大会開催による経済波及効果の試算額は、六七億七〇〇万ユーロ（約一兆一、三〇〇億円）から最大一一億四、五〇〇万ユーロ（約一兆八、八〇〇億円）を見込む。準備期間の二〇一八年から大会後の二〇三四年までの累計としている。

災害級の熱波に襲われれば、大会運営にも支障を来すことになる。競技への参加を見送る選手や観戦をキャンセルする人が増える可能性も否めない。気象分野の関係機関などは気候変動に伴う気温上昇の持続により、欧州で健康被害が出るレベルの熱波に見舞われる確率が上昇しているとの懸念を示す。世界有

数の観光都市で開かれる国際イベントでの暑さ対策の成果は、他国の取組みでも参考になろう。

## 今年も災害級の暑さに警戒

「地球沸騰化」のキーワードが話題に上った昨年は、世界的に観測史上で年間平均気温が最も高かった。温暖化による気候変動は地域の暮らしや社会・経済にも大きな影響を与えることになる。あらゆる策を講じて沸騰を抑え込まねばならないが、今年も世界的に気温は上昇傾向のようだ。

国連の世界気象機関（WMO）によると、今年も気温上昇をもたらすエルニーニョ現象の影響で異常な暑さが各地で続いている。熱波に襲われている東南アジア諸国では、高温で雨も降らず農業部門を中心に被害が拡大し、熱中症による被害も増加傾向にある。同現象は終息したようだが、予断は許さない。

日本の今夏も猛暑が予想される。気象庁の六〜八月の三カ月予報では、平均気温が全国的に高く、八月

は暑さが一段と厳しくなると見る。気象条件によっては観測史上最も暑かった昨年と並ぶ災害級の暑さになる可能性を指摘する。

猛暑の一因はラニーニャ現象。この現象が発生すると、日本付近の高気圧が北へ張り出しやすくなるため高温となる。昨年は東京で三〇度以上の真夏日が五七日連続で観測されるなど、暑さの長期化傾向も顕著だ。

厚生労働省によると、昨年の職場での熱中症の発生状況は、死亡を含む休業四日以上死傷者が一、一〇六人（うち死亡者三一人）。建設業が二〇九人、製造業が二二一人となり、両業種で全体の約四割を占める。死者数は建設業、警備業の順に多く、建設業での暑さ対策は喫緊の課題となっている。

猛暑を考慮した工期の設定など、夏季の働き方自体を見直す動きと合わせ、日々の健康管理と現場での暑さ予防対策の徹底が何より求められる。屋外・屋内問わず、観客も労働者も暑さ対策に万全を期し、今年の夏を乗り切ってもらいたい。